



日本保育学会公式シンボルマーク

日本保育学会会報

2015年1月5日 発行
編集・発行 一般社団法人
日本保育学会
編集責任者 中坪 史典

JAPAN SOCIETY of RESEARCH on EARLY CHILDHOOD CARE and EDUCATION

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-2 B, Rプロジェクト-1
Tel 03-3234-1410 Fax 03-3234-1414
http://jsrec.or.jp

●第161号●



特集

保育の中で「いのち」を考える

「いのち」が大切であるという議論に否定の余地はないだろう。この、あまりに自明の中で私たちは、乳幼児期の子どもたちに対して、どのように「いのち」を大切にできるのか。以下では、それぞれの論者の豊かな見識や経験に触れながら、保育の中の「いのち」について考えてみたい。

木育から考える保育にとっての命

多田 千尋

園児たち50名が入山する前に、山の神様たちに手を合わせてお祈りをする。林道をしばらく上がり、チェーンソーの音がけたたましく聞こえたかと思うと、大木は大きな轟音と共に倒れ、あたりには檜のにおいが立ち込める。そのにおいと音に園児が目を真ん丸くして興奮する。大きく横たわった檜は、今、園舎の大黒柱となって、見事なまでの木造建築物を立派に支える。

岐阜県美濃市の保育園の新園舎が出来上がるまでのプロセスが、命宿る自然の恵みを頂くための貴重な教材となった。

2006年9月に閣議決定された森林・林業基本計画。この中で木育が国の事業として正式に認められた。木育事業を2010年以来受託している東京おもちゃ美術館は森林という自然の力、木という命の力を借りた子育て支援としても捉え、木を真ん中に置いた子育て・子育てアメニティとして捉えなおす好機となった。

同館が木育に目覚めたのは、年間入館者数の40%の6万人を占める乳幼児にこそ、自然と触れ合う木育が必要だと思ったからである。それは、子どもたちの家庭や保育など生活の傍らに命が薄れつつあり、木育こそが命の問題にささやかな貢献ができるのではないかと考えたからだ。もう一つは、五感をフル稼働する乳幼児には木という素材が相応しいと思ったからだ。乳幼児は、人生の中でも最も「五感」で勝負している生き物で、視覚や聴覚で得る情報だけでは物足りず、口に入れたり、触ったり、そしてにおいを嗅ぐことで、情報を得ようとする。

私たちが掲げる「赤ちゃんから始まる生涯木育」は、生活や暮らしが自然と遠ざかっていることへの反省でもある。かつて、「プールと海、どちらが好き？」と都会の

小学生たちに尋ねたところ、圧倒的にプール派が多く、海は怖い、気持ち悪いとかいう子どもまでいたほどであった。海や川、それに森などの命が宿る自然は、子ども時代から仲良く付き合っていないと、アレルギー反応が生まれるようだ。

自然に親しみを感じる木のおもちゃも高価であることから敬遠されがちだ。全国の幼稚園、保育園でも、ヨーロッパの木のおもちゃはあっても、地産地消の木のおもちゃはほとんどない。子どもたちと共に、同じ土と空気ですくすく育つ地元の材が、保育には活かされていない。日本の木のおもちゃの自給率はいまや5%を切っているといった見解もある。

同館の「赤ちゃん木育ひろば」も年間2万人を越える赤ちゃんが訪れるが、国内で最も温かく柔らかい杉を中心に設えてみた。はいはいする赤ちゃんにとって最適な材を専門家に尋ねたところ、皆、杉と答えたからだ。埼玉大学に効果測定をお願いしたところ、他の施設と比べて、「赤ちゃんが泣かない」「パパの滞在時間が長い」「ママが携帯電話を使用しない」などのユニークな調査結果も出た。

昨年の4月からは同館の呼びかけによって、市町村や企業と「ウッドスタート宣言」の締結を進めている。この宣言によって、新宿区を始め、岐阜県美濃市、熊本県小国町、北海道雨竜町、沖縄県国頭村など12市町村が、誕生祝い品として地産地消の木のおもちゃを配り始めた。企業も無印良品が32店舗の店内に、ドイツ自動車メーカーのアウディも全国53ヶ所のディーラーに「木育広場」を開設した。木の力を借り、官民を挙げて、子どもたちを育てていこうとするフォロースルーの風が吹き始めた。

おもちゃはきっかけに過ぎず、子育てを通じて若い両親に木のファンになってもらいたいのである。木の器を使い始めたり、木製の学習機を選んだり、そして木造住宅の一軒家を建てたりと、ウッドスタートは木という命宿る自然物にロングライフで関心を寄せてもらうための素地作りでもある。

●Profile

多田 千尋 (ただ ちひろ)

芸術教育研究所、東京おもちゃ美術館、高齢者アクティビティ開発センターなど代表

児童から高齢者の福祉文化及び幼老統合ケアが専門で、早稲田大学では「福祉文化論」を教える。経済専門誌では「日本の社会起業家30人」の一人に選出される。著書は「遊びが育てる世代間交流」「世界の玩具事典」など多数。

保育の中で「いのち」を考える

高内 正子

誕生して問のない「いのち」を育む保育の場では、いとけない「いのち」の営みを支援するという重要な役割がある。幼い「いのち」を目の前にして、つまり、どのような人でも笑顔になれるといった不思議な力を持つ幼子の姿を目にして、怒りを持つ人は誰もいないはずである。

ともすれば、自己中心的な考えの大人たちの中には、子どもの最善の利益を優先することなく、自分自身の欲望を優先してしまう大人がいたり、子どもの発達に時間がかかることを忘れてしまって、急ぎすぎる大人が現れたりすることもあるが、普通は幼い子どもの姿を見ると、癒されたり、笑顔にさせられたりするものである。「いのち」は、人によって育まれてはじめて、心を持つ人間として育つのである。近年、少子高齢化が進み、代理出産や生命を人工的に操作しようというような動きが見られ、本来の授かりものという日本人に与えられた「いのち」に対する感謝の念が消えつつあるのではないかと筆者は危惧するものである。働く母親たちが疲弊し、つい子どもたちにイライラをぶつけてしまうというようなことが起こらないよう、保育の場では保護者支援は欠かせないものである。保育者は、個人情報を適切に取り扱うなどの社会的責任を負わねばならず、子ども一人ひとりの人格を尊重し、その発達に応じた援助を行わなければならない。

筆者が「いのち」の教育を研究し始めたきっかけは、米国で出会ったDeath Educationであった。筆者が米国に留学した際に、Dixie R Crase博士に筆者の専門は健康教育であることを告げたところ、彼女が「健康教育の中にはDeath Educationも含まれるではないか」と指摘された。後にDeath Educationに関する保育者を対象としたアンケート調査を送ってこられ、日本語に翻訳して、N市内の保育者に調査を実施し、共著論文にして頂いたのが最初だった。当時、日本保育学会で3年にわたり、「幼児に対する死の教育」とタイトルし、研究発表を行った。

わが国では、古代から「死」に対して恐れ忌み嫌う文化が蔓延していた。多くの人々が縁起でもないとか、不吉だなどの表現をして「死」についてタブー視し、語り合うことをして来なかった。米国でも、やはりタブー視された時代はあったが、Elisabeth Kubler-Rossの登場以来、「死」への関心が高まり最近では大学にも死生学 (thanatology) のコースが開設され、宗教家や哲学者、医療関係者などが学び、「死」や「いのち」に対する人々の興味が大きくなっているようである。

乳幼児の頃から「いのち」の大切さについての教育が必要だと筆者が考えるのは、保育の場で活躍している保育者の80%以上の方々に「子どもたちに『いのち」

の教育が必要である」と言う声が見られたからである。その理由としては、飼育動物が亡くなると、「電池を入れ替えれば良い」と言う子どもがいたり、「新しい動物を飼えば良い」と言う子どもがいたりすることを危惧しての回答であった。どのような保育の場にも大小様々な動物が飼育されていて、子どもたちは飼育動物との触れ合いを通して、大いに楽しみ「いのち」に向き合う。そのような飼育動物が「死」を迎える場面に遭遇することもある。その際に、良いチャンスと受け止めるか否かは、保育者自身にもよるが、子どもたちと共に「いのち」について語り合い、学び合う良い機会と受け止め、子どもたちと飼育動物との触れ合いの思い出を語り合うことも、与えられた「いのち」について学ぶことに繋がるだろう。そのためにも保育者は、自分自身の「いのち」に対する考え方を育てておくべきではないだろうか。

●Profile

高内 正子 (たかうち まさこ)
関西学院大学教育学部 教授
看護師として、関西労災病院 (小児病棟・ICU病棟・同主任看護師) 勤務後、聖和大学及び聖和大学大学院教育学研究科修士課程修了後聖和大学に勤務。その間Tennessee州立Memphis大学College of Educationに客員研究員として一年間の留学を経て、現在に至る。

身近な生きものとまみれて「いのち」を学ぶ

藤崎 亜由子

小学2年生の息子はカードゲームにはまっている。数枚を所有して満足している息子であるが、最近うれしそうに「ドラゴンのちからをもらったら いのちがなくなってもふっかつできるなんで」と話しかけてきた。現代の子どもたちは、「いのち」を巡ってことばを交わす頻度が最も高いのはカードゲームなのかもしれないとそのときふと実感した。ちなみに、最近では、戦いに負けた場合を「死亡」とせずに「気絶」というなどの配慮もされているようである。息子の発した「いのち」「ふっかつ」という言葉が少し心にひっかかりつつ、<本物の人間はいのちがなくなったら絶対に復活できないからねえ>と話す、本人は「わからへんでえ〜」とにんまりしていた。<キャルちゃん (飼っていたネコ) も戻ってきてほしいけど復活しないでしょ>と具体例を出してみると、今度は少しことばにつまり、「ママ こわいこといわんといて」と泣き出し、「ママとパパといっしょに てんごくにいきたい どうやったらいっしょにてんごくにいけるの?」と、大泣きしながら抱きついてきた。そこから30分ほどは気持ちが収まらず、あげ句の果てには、「パパとママと一緒に生まれてきたかった (そうしたら一緒に死ぬるもん)」とまで言い出す始末であった。

飼っていたネコが死んだのは、彼が4歳のときであり、

そのときは死んだネコのそばに横たわって死んだふりをしてあそぶなど、「死」の重みは理解できていないようだった。実際、幼児期には死ということをごくまで理解できるのかは難しい。しかし、息子がふと小学生になって感じた死の迫り来る恐怖感のようなものは、それまでの彼の生きもの体験が土台にあったことは間違いないだろう。彼が実際に体験した一番大きな「死」は飼っていたネコの死である。しかし、それ以外にも実はたくさんの「死」と「生」にまみれてきたのである。

例えば、川で捕ってきたエビが酸素不足で大量死してしまったり、せっかく捕ったチョウをうまく網から取り出すことが出来ずに潰してしまったりである。カマキリやドンコなどの捕食者を飼うと、あっという間に周りの生きものが食べられてしまう。ドンコの口から可愛がっていたヨシノボリのしっぽだけが出ているのを発見したときには、なんとも悲しくなる。数えればきりが無いが、幼児期にはこのような無数の身近な生きものの「生」と「死」にまみれる経験を大切にしたいと思う。

自然が無くなったと嘆く声はよく耳にする。確かにそれは事実かもしれない。しかし、その気になって見れば身近に生きものはうごめいている。見えていないだけのことである。実際、私自身が大阪の自宅周辺で撮影した虫や雑草の写真を学生に見せると、「見たことがない」と驚く姿が印象的である。虫や雑草はどんな都会でも出会うことができ、子どもたちが自由にとってさわって遊べる身近な野生である。ぜひ、その出会いを創出し、鑑賞し、あそぶ楽しみを文化として伝えてあげたいと思う。また、ときには虫をちぎったりつぶしたり、残酷なこともするだろうが、そこはおおらかな気持ちで見守ってほしいと思う（大人が奨励するものではないが）。

「いのち」をことばで伝えることは難しい。現在、「いのち」の教育の重要性は高まり、その試行錯誤の実践がさまざまに積み重ねられている。ただし、どのような概念も膨大な体験の総体として理解が深まるのだとすれば、幼児期には何よりもまず、地面でうごめく小さきものたちとまみれる膨大な時間を大切にしたい。子どもたち自身が、自ら見つけて追いかけて捕っていじって確かめる繰り返しの「日常」である。

人間は人間なしには生きていけないが、泣くのも笑うのも腹を立てるのも全て人間相手では、心は疲れてしまうのかもしれない。人間世界の外へといざなってくれる身近な野生（虫など）の存在は、そう考えると愛おしく感じないだろうか。

●Profile

藤崎 亜由子（ふじさき あゆこ）
大阪成蹊短期大学幼児教育学科 准教授
発達心理学を専門とし、生きものとの交流の中で子どもたちが学ぶことの発達の意義を研究テーマとしている。近年は、保育者を目指す学生への生きもの教育の必要性を日々感じている。昨年の思い出は、息子とタマムシを発見したことである。

保育・教育の最も崇高な根本原理

—食農保育・動物介在型保育のすゝめ—

倉田 新

命を大切にすることを育てる

毎日のように報道される虐待、ネグレクト、いじめ、体罰、自殺、戦争、災害、貧困、残虐性すらも商品化する無責任な社会、繰り返される少年少女の痛ましい事件。命を大切にしようとして何度も伝えたとしても麻痺した心には簡単には響かない。子どもたちは無意識のうちに学習して意識化していく。子どもたちが健全で豊かに、そして幸福な人生を歩むことが出来るかどうかの責任は親であり、教育であり、社会である。全ては大人社会の歪みを投影した結果である。現代社会において最も必要で崇高な根本原理は乳幼児期から「命を大切にすることを育てる」ということではないだろうか。

直接体験の重要性

保育所保育指針には「乳幼児期は、生涯にわたる生きる力の基礎が培われる時期であり、特に身体感覚を伴う多様な経験が積み重ねることにより、豊かな感性とともに好奇心、探究心や思考力が養われる。また、それらがその後の生活や学びの基礎になる」と明記されている。この重要性は、古くからルソー、ペスタロッチ、フレーベル、エレン・ケイ、デュイ、モンテッソーリその他多くの先人たちが語ってきた。それは保育・教育の普遍的な原理であると言って良い。

命は命からしか学べない

人は命ある環境の中で育つことで、初めて命と出会うことが出来る。子どもの発達に必要な直接体験は身近な生活の中で命とふれあい命を育てることである。つまり保育者は系統的に命の教育を保育に導入して行く必要がある。命は命からしか学べない。生きることの大切さを学習と結びつけることが重要なのである。そのために必要な保育・教育が食農保育であり動物介在型保育である。保育者は子どもたちと共に命の環境を創造して実践していく役割がある。

保育の質に関わる問題

命を育てるには責任も忍耐も必要である。良い保育と言うのは常に手間の掛かるものである。命を育てることと生と死、自然の摂理を学ぶ。長田新が「フレーベルに還れ」と言ったのは今から約60年前のことである。幼稚園や保育園がなぜ園と言う名がついているのか。フレーベルが庭や花壇を重視したことを忘れてはならない。駅ビル保育園で動物飼育が出来るとか。児童公園を耕して種を植えることが許されるのか。命を大切にすることを育てることは、命とのふれあいの質と量に比例する。大人の都合や好き嫌いから、子どもたちの豊かな原体験を奪うことは許さ

れることではない。無味乾燥な園庭だけでも問題だが更に庭の無い保育園でも認可される異常な時代は日本の未来を崩壊させていく。

命の環境を子どもたちの前に蘇らせる

命を大切にすることを育てることが社会的子育ての構造の中で曖昧で依存的になっている。保育者はそうした現実を認識し育ちの環境をデザインしてより多くの愛情を子どもたちに注がなくてはならない。命を大切にしなさいと言うよりも、あなたが大切であると個々に伝えて行くことが何よりも必要である。生きる力の源はここにある。手塩にかけて愛され育った子どもはの上で愛することを学ぶのである。そして愛されるだけでなくたくさんの人や物を愛することが出来る学びの環境を創造する必要がある。それこそが食農保育であり動物介在型保育である。命の環境を再び子どもたちの前に蘇らせることが日本の急務の課題である。

●Profile

倉田 新(くらた あらた)

東京都市大学人間科学部 准教授

専門は保育原理・児童福祉・保育環境

日本の保育は諸外国と比較しても引けを取らない実践がある。しかし社会的制約の中でその質は低下して行く傾向にある。日本の幼児教育は世界の未来を創るものである。保育環境を子どもの最善の利益に基づいてマネジメントしていくことが研究テーマである。

「自分の命を守る力」を育てる保育とは

範 衍麗

大切な子どもの命を預かる保育所・幼稚園では、子どもの命を守ることを最優先にしなければならない。そのために、安全点検表に基づいた定期点検はもちろん、子どもの目線に立った環境整備と日常点検が行われている。さらに、子どもの年齢や発達過程などに応じた適切な指導を通して、安全への意識や安全な行動力を身に付けさせることが必要である。

保育現場においては、安全性を確保する観点から保育関係者が遊具を固定し、安全な環境構成をした上で、子どもたちを整列させ、教えた動きを練習させる光景がしばしば見受けられる。

筆者は日中の保育の比較を研究テーマの1つとしているが、安全管理については、中国でも日本と同様に細心の注意が払われている。一方で、レジオ・エミリアの教育理念の影響を受け、近年では、幼児に自発的な探索と学習をさせるべきだという理念が普及しつつある。2013年に視察した中国の幼稚園では、大学の研究者と保育現場の保育者が連携して、遊具を用いて子どもの自発性を引き出すプログラムが展開されていた。

例えば、年長の子どもたちは自ら、寝かせたタイヤの上に梯子を乗せて“シーソー”を作り、梯子の両端に座って、相手の動きを感じながら、シーソー遊びを楽しんでいた。そのうちに梯子が前後にずれたため、子どもたちは体の重心を移動させ、バランスを取り戻すようにした。また、小麦の殻を入れた袋をタイヤの中に入れて、タイヤの安定を図ることもしていた。このようなバランスを保つ遊びを通して、調整力や平衡感覚などの運動能力を高めるほか、自ら考えて確かめるなどの安全に必要な知識や態度などを身につけさせることができたと考えられる。

子どもたちが自発的に遊べるようにするため、保育者は通常の保育活動以上の配慮を行っていた。この活動で使われている遊具を毎日点検するだけでなく、子どもが遊具にかかわって生み出す様々な遊びの状況を想定しながら、安全な保育環境を構成した。それに加え、遊ぶ前に安全のためにすべきことを子どもに考えさせ、遊んでいる最中に、危険な行動や遊び方が見られた場合は、その場で気付かせるように働きかけていた。また、遊びの後には、安全のために子どもたちが自ら工夫したことなどを話し合う場を設けていた。こうした丁寧な配慮と指導があって始めて、この遊びは成立している。

このように子どもに繰り返し指導し、安全についての理解を深めさせることで、安全への意識や関心を高めることができる。また、遊具を使った自発的な遊びを通して、子どもの運動能力を高めるだけでなく、子どもの自ら考える力や安全な行動力など、自分の命を守る力を育てることにもつながると考える。

保育とは目の前の子どもを見守るだけではなく、子どもの未来を見据えた営みでなければならない。危険だから排除するのではなく、それをどう保育に組み込むか、そしてどこまで子どもの自発性に任せるか、保育者自身が適切な判断を行えるよう、自ら専門性を高めていくことが求められる。子どもの命を守ることは保育の第一条件ではあるが、子どもたちが、自分自身で自分の命を守る力を育てていくこともまた、保育の大切な仕事であると感じている。

●Profile

範 衍麗(はん えんれい)

大阪成蹊短期大学幼児教育学科 講師

主な研究テーマは、保育園・幼稚園の安全管理と幼児の安全教育、日中の保育内容の比較などである。

「現在」を生きる子どもたち

天野 珠路

先日（2014年9月28日）、福島県の浜通り地区を訪れました。その際、全線開通されたばかりの国道6号線をいわき市から南相馬市方面へ向かいましたが、当然のことながらたいへん線量が高く、周囲の風景は2011年3月11日から止まったままでした。崩れ落ちたままになっている富岡町駅近くの時計の針は14時47分を指し、どこもかしこもセイタカアワダチソウとススキが生い茂っています。国道からの脇道には「帰還困難地域」の看板があり、海寄りにも山あいにも大きな黒い袋の山が積まれていました。町を壊し、人々の暮らしを奪った原発事故の恐ろしさと理不尽な現実を改めて突き付けられた思いでした。

東日本大震災から3年半以上が経ち、2011年に生まれた子どもたちは3歳になり、3歳だった幼児は小学生になっています。当たり前前のことですが、子どもたちの成長は待たなしで、生活の場が仮設住宅であっても、故郷から遠く離れた地であっても、今、ここにいること、ここで生きることがすべてであり、一人ひとりの子どもにかけがえのない日々の営みがあります。様々な人やモノと出会い、かかわり、育ちゆく存在である子どもは大人たちの喜びや心配の種でもありますが、希望であることに違いありません。

現在、福島県によると東日本大震災にかかわる子ども（18歳未満）の「避難者」は約3万人であり、その約半数は県外で生活しています。町ごと避難した大熊町は会津若松市で幼稚園を再開し、楢葉町はいわき市で、富岡町は郡山市などで保育所を再開していますが、子どもたちにとって保育の場はまさに生活の場そのものでしょう。避難や仮設という言葉が吹き飛ぶような子どもたちの生き生きとした姿があり、心打たれます。

また、依然、放射線量を常に意識し、外遊びや散歩などを規制している園もありますが、子どもたちの運動量に配慮して室内にダイナミックな運動遊びの場を設けたり、徹底的に除染し、園庭の改造に取り組んだりした園もあります。子どもと保護者の心身の状態をサポートする取組は自治体やNPO法人などが主宰して様々なところで行われていますが、保育所や幼稚園においては、日常のかつ継続的なかわりのなかで丁寧に行われています。こうした取組をサポートする専門家や地域の人たちもおられ、重要な役割を果たしていますが、支える人を支える繋がりが必要であるように感じています。

一方、全国学校保健統計調査（文部科学省）では、平成25年度、福島県内の子どもたちの肥満率が他県

と比べ高く、たとえば10歳男児の肥満率は21.27%（全国平均は10.90%）、6歳の男児は8.12%（同4.18%）、女児は7.12%（同3.91%）でした。保育・教育現場では子どもの運動量や生活習慣全般を見直しながらか改善していこうと取り組んでいます。家庭との連携が欠かせません。乳幼児期からの積み重ねの大切さを痛感しながら保育の充実を図り、子どもの心と体の健康を維持向上しようと保育者たちは懸命です。その中には子どもの健康に関わる調査をしたり、学習や研究を積む方もおられます。

東日本大震災を経て保育現場ではこれまで以上にいのちの大切さや子どもの生きる力を育てていくことに意識的であり、「現在を最もよく生きる」ための努力が続けられています。

●Profile

天野 珠路（あまの たまじ）

日本女子体育大学体育学部スポーツ健康学科 准教授

保育園、幼稚園で約20年間保育者として勤めた後、横浜市保育課、國學院

大学幼児教育専門学校、厚生労働省保育課（保育指導専門官）を経て現職。

保育現場において働きだされる保育環境と保育内容に関する考察を重ねると

ともに、東日本大震災後の保育支援に携わる。

おしらせ

第68回大会開催

- ・日 付：2015年5月9日（土）9：30～
5月10日（日）9：30～
- ・会 場：椋山女学園大学
- ・開催地区：中部地区ブロック
- ・大会テーマ：保育文化の創造

第68回大会ホームページ

<http://www.hoiku-68taikai.info/>

* 大会予約参加の申込期限 *

発表はせずに大会へ参加のみされる方の事前申込み期限は1月20日（火）までとなっております。大会ホームページより申込みが出来ますので、奮ってご参加ください。

発表形式についてのお知らせ

第68回大会をもって、発表形式の「ビデオ実践研究発表」が終了となります。第69回大会以降、「ビデオ実践研究発表」での発表はできませんのでご注意ください。